



左：旧遠友夜学校



上下：新渡戸稲造記念館 外観および室内パース

遠友夜学校とは

新渡戸稲造が札幌農学校の教授をしていた頃、新渡戸稲造とメアリー夫人は夫人の実家エルキントン家から贈与された基金をもとに、私財を投げ打って、札幌市の貧しい人々の子弟のための学校を設立した（1894年）。

エルキントン家からのこの基金は、エルキントン家に引き取られ、メアリー夫人の幼い頃は乳母として、成長してからも姉妹のように育てられた孤児が亡くなった際に彼女が残したものだと言う。遠くの友より贈与された基金をもとに作られた夜学校、また、学ぶ意志あるものは年齢性別門地の区別なく入学させる趣旨で、「友あり遠方より来る。また楽しからずや」にも通じるということで遠友夜学校と名付けられた。

これより先、新渡戸夫妻は最愛の息子遠益（トーマス）を病気で亡くしている。遠友にはこの「遠益の友」という意味合いもあったのだろう。更に、彼の信ずるキリスト教の一派はクエーカー教“フレンド派”であった。この学校では北大生が無償で教鞭をとるばかりか、自分達の工面した金で教科書を買ひ、生徒たちには無料で与えていたのである。大学での学業の後に「夜学校の近くになると時間はあるのに走ってしまう」（教務日誌）というようにいそいそとやって来る学生教師と、昼間の労働の疲れを癒す間もなく、「はだしで走って」（生徒手帳）学校に集まる生徒達。「両者はこの学校に互いに引き合った。そして白熱を発し合ったのだった」（学生教師だった高倉新一郎）。

新渡戸稲造が設立した、貧しさ故に昼間の学校に通えない子供たちのための夜学校、遠友夜学校は「弱者に対する優しい視線を持って」「知識や正義や人々の向上のために大志を抱け」という札幌農学校開学以来の伝統精神の北大生達による実践であった。

—藤田正一著『日本のオールタナティブ』銀の鈴社より転載許諾済